

## 論 説

## 生産条件の所有と生産様式

頭 川 博

## 目 次

はしがき — 問題の所在

- 1 相対的剰余価値生産と生産様式
- 2 生産様式と生産条件の所有
- 3 労働過程の一般的性格と歴史的規定性
- 4 資本主義と高度な生産力

む す び

## はしがき — 問題の所在

マルクスによれば、資本主義社会では、生産力の担い手である近代工場の基礎には、資本家による生産条件（生産手段プラス生活手段）の排他的所有という敵対的な生産関係がある。資本主義的生産にあつて、近代工場は、資本家による社会的な生産条件の排他的所有に規定され、多数労働者による共同労働という労働の独自の社会的形態を内包するがゆえに生産力を増進させ、相対的剰余価値の生産をもたらす。つまり、職住一致が原則をなす資本主義以前の生産形態にたいして、資本主義になって初めて職住分離が成り立ち協業をベースとした生産の基本形態としての工場が成立する前提には、資本家による生産条件の排他的な所有という生産関係が存在する。これに反して、機械制作業場の立脚するその社会的基礎をみのがしたところに、古典派経済学による相対的剰余価値論の非歴史的な欠陥がある<sup>1)</sup>。

ところが、近代工場を担い手として増進する生産力の社会的基礎には資本家

による生産条件の排他的所有があるとすれば、第4篇第10章「相対的剰余価値の概念」に登場する「生産様式」には生産条件の所有関係が包含されていることになる。つまり、限定のない生産様式は、超歴史的な範疇ではなく、特定の生産関係を包蔵していることになる。ただし、古典派をこえるマルクスの功績によれば、機械制大工業の基礎をなし第10章での「生産様式」を構成する協業や分業などは、それ自体資本家による生産条件の排他的な所有を社会的基礎に成り立つからである。念のため、「生産様式」が登場する代表的な箇所をしめせば、以下のとおりである。

「たとえば、ある靴屋は、与えられた手段で、一足の長靴を12時間の1労働日で作ることができる。彼が同じ時間で2足の長靴をつくろうとすれば、彼の労働の生産力は2倍にならなければならない。そして、それは、彼の労働手段か彼の労働方法かまたはその両方に同時にある変化が起きなければ、2倍になることはできない。したがって、彼の労働の生産条件に、すなわち彼の生産様式に、したがってまた労働過程そのものに革命が起きなければならない。」( *Kapital*, I, *Werke*, Bd. 23, S. 333, *Kapital* の訳文は原則として『マルクス＝エンゲルス全集』大月書店による )

「労働の生産力を高くし、そうすることによって労働力の価値を引き下げ、こうして労働日のうちのこの価値の再生産に必要な部分を短縮するためには、資本は労働過程の技術的および社会的諸条件を、したがって生産様式そのもの (die Produktionsweise selbst) を変革しなければならないのである。」( *Ibid.*, S. 334, 圏点－頭川 )

「改良された生産様式を用いる資本家は、他の同業資本家に比べて1労働日中のより大きい一部分を剰余労働として自分のものにする。彼は、資本が相対的剰余価値の生産において全体として行なうことを、個別的行なうのである。<sup>2)</sup>」( *Ibid.*, S.337 )

だから、その無限定性に着目して「生産様式」を単純に超歴史的な労働過程の範疇とみなすならば、古典派を超克してえた第4篇におけるマルクスの獨創性は否定されることになる。第4篇にかんする古典派をこえるマルクスの獨創性の承認と「生産様式」が生産関係を含む事実の認知とはペアである<sup>3)</sup>。一歩

つっこんでいえば、「生産様式」が生産関係を含むという論点は、『資本論』の基本問題の一つにはほかならない。「生産様式」が生産関係を含む事実には、以前のどの生産形態にも見られない資本主義的生産の高度な生産力の秘密をとく鍵が隠されているからである。資本主義社会にあつては、資本は、具体的には協業や分業を基底にもつ近代工場というそれ以前にはない多数労働者からなる大規模な生産形態として存在する。そうだとすれば、資本が多数労働者からなる労働の独自に社会的な形態として実在することから、そこには本来的に歴史上特筆すべき高さの生産力が内包されていることになる。資本の生成は、希代の高さの生産力の形成と同じである。だから、資本蓄積が生産力の高度な発展をあいともなうのは、原理的にいえば、資本そのものが労働の独自に社会的形態から成り立つ本質的な事実起因する。その意味で、「生産様式」が生産関係を含有するという論点は、資本主義における歴史上例のない高度な生産力の淵源を根底からときあかす説明原理に等しい。

それゆえ、本稿の課題は、近代工場の社会的基礎には資本家による生産条件の排他的所有がある事実から、無限定の生産様式には生産関係が含蓄されている内面に直球できりこむ一方<sup>4)</sup>、資本主義における高度な生産力は生産様式の要素をなす敵対的な生産関係に由来する因果を結論する。これによって『資本論』研究をおおう殻の一つをやぶることになろう。

- 1) 拙稿「資本主義的生産関係と生産力」(『一橋論叢』第117巻第6号、1997年)参照。
- 2) 以下にかかげる表現は、すべて生産様式の言い換えだと思われる。「生産過程の技術的基礎や社会的結合」(*Kapital*, I, S. 324)・「労働の技術的諸過程と社会的諸編成」(*Ibid.*, S.533)・「労働過程の組織と技術」(*Ibid.*, II, *Werke*, Bd. 24, S. 42)・「労働過程の技術と社会的組織」(*Ibid.*, S.61)。
- 3) 生産様式にかんして、生産力と生産関係との統一説と生産関係を含まない単なる労働過程説の二つが対立している(林直道「史的唯物論と『生産様式』の問題」『科学と思想』第13号、新日本出版社、1974年所収、135-6ページ、芝田進午『人間性と人格の理論』青木書店、1961年、82ページ)。しかし、前者と後者とのあいだには、第10章で登場する「生産様式」が生産関係を内包しない労働過程の範疇だとみなす点で意見の相違は存在しない。つまり、第10章で登場する「生産様式」に

かんしては、両者の対立は砂のうえに書いた文字のように簡単に消えさるのである。『資本論』研究上の問題としては、第10章での無限定の生産様式が第5章第1節で規定される単なる労働過程の範疇か否かこそ決定的な論点である。なぜならば、無限定の生産様式が生産関係を含まないという主張は、協業や分業が資本主義に独自の根拠をもって成り立つその創造物である事実を否定する一方、資本主義のもつ生産力の特異性を資本そのものから内在的に説明しないからである。そもそも、さかのぼっていえば、生産条件の所有問題ぬきには労働過程は成立しないという命題と無限定の生産様式は生産関係を含まないという系論のあいだには、架橋不能な断層がある。

- 4) 以前、第10章の「生産様式」をもって生産関係を含まない超歴史的な労働過程をあらわすという立場をとった（拙稿「剰余労働消滅と個人的所有の再建」『高知論叢』第48号、1993年、6-7ページ）。これは、その時点で、第4篇が研究の空白域をなし生産関係の重層性に着目して第3篇と第4篇との関係を理解できなかった未熟さに起因する。

## 1 相対的剰余価値生産と生産様式

マルクスは、第3篇の絶対的剰余価値論で既存の生産様式的前提上で資本による剰余労働の本源的生成をといたうえで、第4篇の相対的剰余価値論になって初めて生産様式の変化をとりいれ剰余価値生産にたいする生産力の作用を考察した。そこで、なぜ第4篇になって初めて生産様式の変化が問題対象になるのかというプリミティブな疑問が生まれる。実は、第4篇で生産様式の変化が分析対象になる脈絡のなかに問題をとく手がかりが伏在する。本節では、第4篇で生産様式の変化が初めて問題になる所以を解決する。

マルクスは、第3篇で剰余労働の生成をとくさい、さしづめ、資本によって生産様式は変革されず、既存の生産様式的前提上で労働力の生産的発揮が実現されるという想定をおいた。「資本は、さしあたりは、歴史的に与えられたままの労働の技術的諸条件をもって、労働を自分に従属させる。したがって、資本は直接には生産様式（die Produktionsweise）を変化させない。」（*Kapital*, I, S. 328）「資本への労働の従属は、ただ形式的でしかなかった。すなわち、生産様式そのもの（die Produktionsweise selbst）は、まだ独自の資本主義的性格（ein spezifisch kapitalistischer Charakter）をもっていなかつ

た。」(Ibid., S. 766)「労働過程の資本のもとへの従属はさしあたりは現実の生産様式を少しも変えない。」(『直接的生産過程の諸結果』国民文庫、岡崎次郎訳、469h [原] ページ)「生産様式そのものにはこの場合にはまだ相違は生じていない。労働過程は、技術的に見れば、以前とまったく同じに行なわれる。」(同上、473 [原] ページ) ついで、労働過程は人間と自然との物質代謝の条件としてはあらゆる社会形態に共通することから、多数労働者による共同労働という契機を捨象するという手続きをふむ。「労働過程は、…人間生活のあらゆる社会形態に等しく共通なものである。それだから、われわれは労働者を他の労働者との関係のなかで示す必要はなかったのである。一方の側にある人間とその労働、他方の側にある自然とその素材、それだけで十分だったのである。」(Kapital, I, S. 198f.)

多数労働者の共同労働を含む大規模な生産様式の資本による形成は、第4篇で初めて分析対象になる。「労働が資本に従属することによって起きる生産様式そのものの変化 (die Verwandlung der Produktionsweise selbst) は、もっとあとになってからはじめて起きることができるのであり、したがって、もっとあとで考察すればよいのである。」(Ibid., S. 199)「相対的剰余価値の生産とともに、生産様式の現実の全姿態が変わって、独自に資本主義的な生産様式が発生する。」(『直接的生産過程の諸結果』、472 [原] ページ)

それでは、なぜ第4篇にいたって生産様式の変革が問題対象になるのだろうか。単刀直入に言えば、第3篇でその秘密がとかれる剰余労働の本源的生成は、生産条件の労働者からの分離という資本主義的生産関係のもつ基底的な一面に起因するからである。賃労働者の前身である独立生産者には生産条件が個人的に所属するがゆえに、その1労働日は蓄積財源を生み出す労働支出分を含めすべて生産条件を所有する労働者の再生産に要する必要労働である。一方、独立生産者からの生産条件の分離にともなうその賃労働者への転化に対応して、労働力としての必要労働分量は単なる労働力の再生産に要する狭隘な労働分量に圧縮される半面、労働力の使用価値を取得した資本家によるその自由な消費によって、労働日はその必要労働分量をこえて延長され、ここに独立生産者の場合には存在しない剰余労働が本源的に生成することになる。剰余労働は、必要

労働分量の圧縮とそれをこえる労働日の延長という正反対の方向をもつ運動の帰結であるが、必要労働の圧縮—労働力の価値—とそれをこえる労働日の延長—労働力の使用価値—という逆方向の二面的運動は、ともに敵対的な生産関係に由来する。剰余労働は、労働生産性がいかに高くても労働者が生産条件の所有者であるかぎり発生しない反面、特定水準以上の労働生産性の前提上で生産条件の労働者からの分離という特定の社会関係が与えられれば必然的に生成する。第3篇で生産条件の労働者からの分離にもつばら着目されるのは、その分離という特定の生産関係の基本的な一面こそ資本関係の核心として剰余労働生成の決め手をなすからである。「絶対的剰余価値—生産性の所与の段階を前提とする—」(MEGA, II / 3 · 6, S. 2038, MEGAの訳文は原則として『マルクス資本論草稿集』大月書店による)という規定がしめすとおり、賃労働者による剰余労働の本源的支出は、既存の生産性の基礎上で純粹に生産関係の敵対性によって成り立つ。マルクスが「資本 {すなわち生産条件の労働者からの分離 (die Trennung der Produktionsbedingungen vom Arbeiter)}」(Mehrwert, III, MEGA, II / 3 · 5, S. 1854, 圈点—マルクス)とか「一方の労働条件と他方の生産者との分離こそは、資本の概念 (der Begriff des Kapitals) を形成する」(Kapital, III, Werke, Bd. 25, S. 256)とかいうのは、資本主義的生産関係の最も本質的な契機が生産条件の労働者からの分離という資本と賃労働の敵対性そのものにある事実に起因する。マルクスは、「資本主義的生産の対立的な性格 (der gegensätzliche Charakter der kapitalistischen Produktion) にもとづいて行なわれる資本の価値増殖」(Ibid., S. 457)と規定する一方、「資本主義的生産の本質をなす対立それゆえすでに絶対的剰余価値の考察のさいにその特徴が示された対立」(MEGA, II / 3 · 6, S. 2014, 圈点—マルクス)と明言しているが、ここには、生産条件の労働者からの分離そのものが敵対的生産関係のもつ基本的な一面をなすと同時に、その分離こそ剰余価値の本源的な生成をもたらす秘密が語られている。

しかし、理論上、資本主義的生産関係は、生産条件の労働者からの分離という基本的な一面のうえに、少数の資本家のもとへの社会全体の生産条件の集積という別の追加的な一面が上積みされて初めて完成する。というのも、資本主

義的生産関係は、独立生産者のもつ社会全体の生産条件が少数の資本家のもとへ集積することによって生成するからである。「相対的にわずかな人々の手中への生産手段の集積は、そもそも資本主義的生産の条件および前提である。」(MEGA, II/3・1, S. 327, 圏点—マルクス)「資本家は、社会的な規模での生産手段の所有者または所持者でなければならない。」(MEGA, II/3・6, S. 2143, 圏点—マルクス)「個人的で分散的な生産手段の社会的に集積された生産手段への転化<sup>1)</sup>」(Kapital, I, S. 789)。資本主義的生産関係は、生産条件の労働者からの分離という基底的一面とわずかな資本家のもとへの社会的な生産条件の集積という追加的な一面の二つの立体的な統一から成り立つ。剰余価値生産を遺漏なく分析するには、二つの面の重層的な統一からなる生産関係の全体を問題対象にとりこまねばならない。資本主義的生産関係のもつ基底的一面と剰余価値生産との関係だけでは、資本主義的生産関係のもとでの剰余価値生産の考察としては画竜点睛を欠く。マルクスが第10章でつぎのようにいうのは、資本主義的生産関係のもつ概念上区別される二面性のためである。「これまで考察してきた形態での剰余価値の生産では生産様式 (die Produktionsweise) は与えられたものと想定されていたのであるが、必要労働の剰余労働への転化による剰余価値の生産のためには、資本が労働過程をその歴史的に伝来した姿または現にある姿のまま取り入れてただその継続時間を延長するだけでは、けっして十分ではないのである。」(Ibid., S. 333f.) 第4篇において、資本主義的生産関係のもつ追加的な一面は、第3篇で剰余労働の生成メカニズムを説明するさい捨象されたがゆえに復元されることになる。

資本家の排他的所有になる生産条件のうち、生活手段は資本家自身の個人的消費分をのぞいて多数労働者の労働力におきかわって生産手段とむすびあわされるから、資本家の生産条件は、独立生産者の場合とちがって多数労働者による労働の独自に社会的形態からなる大規模な労働過程という具体的な姿をとって存在することになる。したがって、生産様式<sup>2)</sup>の変化が第3篇では捨象され第4篇で分析対象になるのは、資本主義的生産関係のもつ基底的一面とそのうえに成り立つ追加的な一面との二面性に起因する。資本主義的な生産関係は、資本関係のもつ敵対性と少数の人々のもとでの生産条件の集積という二面の不

可分の統一からなるがゆえに、生産方法と同義語としての生産様式の変化は第3篇では捨象され第4篇で初めて分析対象になるのである。第4篇で生産様式の変化が分析対象になることとそこで資本主義的生産関係のもつ追加的な一面が問題になることは同一の事柄である。第4篇で生産力増進の手段としての協業や分業などの生産様式が分析対象になるということは、それが生産力増大の特殊歴史的な方法だということに等しい。「ここで問題になるのは、むしろ、それ自体が資本主義的（総じて社会的）生産の所産であるかぎりでの労働の生産力なのである。」<sup>31)</sup> (MEGA, II / 3 · 1, S. 229, 圈点—マルクス) だから、第3篇では敵対的な生産関係の追加的な一面にもとづく特有な生産様式が捨象され、資本関係成立以前の既存の生産様式的前提上で剰余労働の生成がとかれたことになる。「マニファクチュアの発生を資本の生産様式の発生として前提するときには、資本そのものによつてはじめて呼び起こされることができる労働の生産力はまだ存在していないと前提されている。」(Grundrisse, MEGA, II / 1 · 2, S. 479, 圈点—頭川) 絶対的剰余価値生産が既成の生産様式的前提上でとかれるとは、そこでの資本による生産力増進の捨象と同義である。

第3篇での既存の生産様式から第4篇での新しい生産様式への転化を別の面から見れば、それは、資本による労働の形式的包摂からその実質的包摂への転化でもある。労働者は、既存の生産様式の基礎では、生産条件の労働者からの分離そのものによつて剰余労働の支出が強制され資本に包摂される一方、新しい生産様式では、資本家のもとの生産条件の集積にもとづく「大規模な労働」(MEGA, II / 3 · 6, S. 2045, 圈点—マルクス)の仕方様式に組みこまれることによつて剰余労働を含む労働支出が成り立ち資本に包摂される。理論上、既存の生産様式では、剰余労働の支出があるとはいえ、個々人の独立した労働支出が成り立つ一方、新しい生産様式では、労働者の労働は、孤立的な労働としてではなく、有機的な結びつきをもつ共同労働の仕方様式のなかに組みこまれた姿で成り立つ。資本による労働の形式的包摂は、生産条件の労働者からの分離にもとづいて実現する孤立的な労働の剰余労働支出をさし、その実質的包摂は、資本家のもとの生産条件の集積にもとづいて実現する共同的な労働の仕方様式に組みこまれた特有な形態での剰余労働支出をさす。両者ともに、



剰余労働支出が強制される点で、資本による労働の同じ包摂が成り立つ半面、労働者の労働が孤立的な労働としてか共同的な労働の仕方様式に組みこまれた特有な形態として実現されるかという点で、同じ包摂の形式的と実質的の相違が画される。したがって、同じ資本による労働の包摂の形式的と実質的の相違は、資本主義的生産関係のもつ二面性に由来する。

以上、本節で、生産様式の変化が第3篇ではなく第4篇において分析対象になるのは、資本主義的生産関係のもつ重層性に起因する事実を主張した<sup>4)</sup>。もし資本主義的生産関係の二面のもつ重層性に対応した第3篇から第4篇への上向にかんする立論が説得力をもつとすれば、逆に、生産関係のもつ敵対性による剰余労働生成の分析の正否が回帰的に検証されたことになる。具体的なものへの上向の仕方いかんは抽象的なものの説明の当否をふるいにかけるからである。先回りしていえば、生産関係の重層性にもとづいて第4篇で生産様式の変化が分析対象になるという事柄のうちに、生産様式が生産関係を内蔵する事実が含まれているのである。だから、生産様式が単なる労働過程に属する範疇だという主張の淵源は、生産関係の重層性に対応した第3篇から第4篇への上向の理解の欠如にある。

- 1) 「それ自体として社会的生産様式の上に立っていて生産手段や労働力の社会的集積を前提している資本」(*Kapital*, III, S. 452)。
- 2) 生産様式は、「労働過程そのものの仕方様式 (die Art und Weise des Arbeitsprocesses selbst)」(*MEGA*, II / 3 · 1, S. 121)と同じである。あるいは、生産手段と労働力との結合の仕方とも表現される。「この(生産手段と労働力の一頭川)結合が実現される特殊な仕方は、社会構造のいろいろな経済的時代を区別する。」(*Kapital*, II, S. 42)先回りしていえば、生産様式が生産形態を区別するのは、そこに生産関係が内蔵されているからである。
- 3) 堀江英一氏によれば、絶対的剰余価値生産は、資本主義的生産力を捨象した1人の資本家と社会的に結合した多数労働者の代表単数としての1人の労働者という生産関係のなかでも成り立つ一方、相対的剰余価値生産は、そこに協業・分業・機械からなる資本主義的生産力を復活させて成立するより具体的な関係だといわれる

(『改訂産業資本主義の構造理論』有斐閣, 1962年, 88-90ページ)。協業・分業・機械が「資本主義的生産力」(同上, 88ページ, 圏点-頭川)だということは, その生産力の社会的基礎には生産関係があることに等しく, 第3篇と第4篇との関係は生産関係のもつ重層性に対応することになる。したがって, 協業・分業・機械=資本主義的生産力という理解は含蓄にとむ。

- 4) 第3篇から第4篇への移行を労働日の想定の変化にもとめる見解は, 労働日不変という条件が協業・分業・機械という三つの契機を内面的に説明しない点で正鵠を射ない欠陥をもつ。第3篇で捨象された資本主義的生産関係のもつ追加的な一面が第4篇で分析対象になると考えて初めて, その追加的な一面から協業・分業・機械が問題になる内面的な脈絡に合理的説明がつく。ちなみに, 労働生産力を規定するのは「労働者の技能の平均度, 科学とその技術的应用可能性との発展段階, 生産過程の社会的結合, 生産手段の規模および作用能力…、さらにまた自然事情」(*Kapital*, I, S. 54) など多種多様な要因であるのに反して, 「生産過程の社会的結合」や「生産手段の規模および作用能力」など一部だけにかかわる協業・分業・機械が第4篇で分析対象になる所以は, 生産関係の追加的な一面の復元という手続きにある。また, 第3篇と第4篇がそれぞれもつ章別構成のきわだった性格の違いは, 生産関係の基底的一面と追加的一面という問題対象の相違に由来する。

## 2 生産様式と生産条件の所有

前節で, 生産様式の変化が第4篇で分析対象になるのは, 第3篇で資本主義的生産関係のもつ二面のうち生産条件の労働者からの分離という基底的一面にのみ着目され, 資本家のもとでの社会的な生産条件の集積という追加的な一面が捨象されたことによる事実を考察した。いうまでもなく, 資本主義的生産における生産様式は機械制大工業という完成形態をもって存在する一方, 歴史上実在的な姿としてはマニュファクチュアと機械制大工業という二つの形態をとる<sup>1)</sup>。本節では, 大規模生産という近代工場制度のもつ最も基本的な特色に着目して, 第10章に登場する限定のない生産様式は, 生産条件の所有を内蔵している事実を分析する。

マルクスにあっては, 機械制大工業は, 労働者が労働手段を使うマニュファクチュアとはちがって, 労働手段が労働者を働かせるがゆえに資本に最も適的な生産形態をなす。資本とは, 死んだ労働自体が主体となって生きた剰余勞

働を吸収することによって自己増殖する価値だからである。「資本主義的生産様式から生まれる工場制度」(*Kapital*, III, S. 456)といわれるとおり、固有の生産空間としての工場は資本主義の特有な所産であるが、資本にとって工場といえ、それは典型的には機械制作業場をさす。「資本主義的基礎のうえで行なわれている機械制に対応する発達した労働組織が工場制度である。)(*MEGA*, II / 3・6, S. 1903, 圈点—マルクス) 機械制大工業こそは資本主義での生産様式の完成形態である。ところが、産業革命によって成立した機械制大工業は、歴史上、いくつかの種類の部分労働者が道具を使って共同生産物を完成する作業場内分業としてのマニファクチュアが発展転化した生産形態にほかならない。マニファクチュアにあつては、労働対象に接触して生産物を完成する労働手段としての道具は、なるほど労働者とは別個に存在する客体にはちがいが無いが、手のもつ熟練した技能が道具という客体を介して労働対象に働きかけ生産物ができあがるとみるかぎりでは、それ自体労働者の手の延長にすぎない。その意味で、道具は、「個々の労働者の個人的な腕まゝに依拠して使用される用具」(*MEGA*, II / 3・1, S. 269)・「労働者自身の技能の伝導体」(*Ibid.*)・「彼の自然的器官に付け加えられた人工的器官」(*Ibid.*)である<sup>2)</sup>。労働者の手の延長としての道具は、動力源が自然か否かに関係なく、それが労働者の手からはなれて独自に労働対象に働きかけ生産物を加工する作業機部分をもつにいたれば、それと概念上区別される機械に転化したことになる。機械制大工業は、作業場内分業の前提上で、労働者が使う手の延長としての道具が作業機部分を本質的要素とする機械におきかわった生産形態にほかならない。「機械の充用はもともと存在条件としての分業にもとづくマニファクチュアを前提している。」(*Ibid.*, S. 294)だから、機械制大工業は、その軸である機械を道具におきかえれば、作業場内分業が編成されるマニファクチュアに還元される。

ところが、作業場内分業は、同一空間での多数労働者の共同労働を論理的前提にして初めて成り立つから、マニファクチュアそれ自体もまた、さらに同一空間での多数労働者の共同労働たる協業に帰着する。完成生産物に結晶する総労働のいくつかの種類の特異な部分労働への分割は、多数労働者の共同労働

を前提にするからである。「分業は協業を前提する、いいかえれば、それは協業の一つの特殊な様式にすぎない。機械にもとづく作業場なども同様である。」(Ibid., S. 229)「資本の拡張がそうであるように、分業の充用も、その根本前提として、協業つまり労働者の集聚を必要とする。」(Ibid., S. 265)「労働の生産諸条件からの個人の分離は、多数の人々が一つの資本のまわりに集まることとイコールなのである。」(Grundrisse, MEGA, II / 1 · 2, S. 480)だから、総じていえば、資本に適合的な生産形態としての機械制大工業の基礎は、同一空間における労働者の共同労働としての協業である(機械制大工業→マニュファクチュア→協業)。「協業は、社会的労働の生産性を増大させるためのすべての社会的な手だての基礎をなす一般の形態である。」(MEGA, II / 3 · 1, S. 229, 圈点—マルクス)「協業 (die Kooperation) はつねに資本主義的生産様式の基本形態 (die Grundform der kapitalistischen Produktionsweise) なのである。」(Kapital, I, S. 355)「資本主義的生産過程のすべての発展した形態は協業の形態なのだ。<sup>3)</sup>」(Ibid., S. 555)「労働の社会的生産力の発展は大規模な協業を前提し、ただこの前提のもとでのみ労働の分割と結合とを組織することができ、生産手段を大量的集積によって節約することができ、素材から見ても共同的にしか使用されえない労働手段たとえば機械体系などを生み出すことができ(る)。」(Ibid., S. 652)「労働者たちの結合と彼らの協業こそは、大規模な機械使用や生産手段の集積やその充用の節約を可能にする。」(Ibid., III, S. 102)資本の特有な生産形態が必然的に協業の姿をとるということは、資本主義的生産が本来的に大規模生産だという事実と同義である<sup>4)</sup>。

それでは、機械制大工業を協業というその基礎でとらえれば、資本の特有な生産形態が不可避免的に協業という姿をとるのはなぜか。それは、まさに、資本家による社会的な生産条件の排他的所有による。独立生産者の場合、生産条件は個人的所有のため分散的で矮小である一方、独立生産者から収奪された全社会的な生産条件が少数の資本家のもとに排他的に集積すれば、個別の資本家に帰属する生産条件の規模は独立生産者のそれに比してはるかに大きくなる。本源的蓄積にともなう資本家による社会的な生産条件の排他的所有は、個別の資本家に帰属する生産条件の大規模化を媒介にして、資本の特有な生産形態とし

での協業を規定するのである。けだし、同一空間で多数労働者の共同労働が成り立つためには、個別の資本家のもとでの大規模な生産条件の集積という物質的条件がなければならないからである。「協業は、もちろん、資本家の手中への労働手段の集積ならびに生活手段の集積を必要とする。」(MEGA, II / 3 · 1, S. 234, 圏点-マルクス)「個々の資本家の手のなかにかなり大量の生産手段が集積されていることは、賃金労働者の協業の物質的条件なのである。<sup>9)</sup>」(Kapital, I, S. 349) 資本家による生産条件の排他的所有は、いわば合わせ鏡のように、自己を大規模な工場という特有な形態に映しだす。

それだから、要するに、資本家が社会的な生産条件を排他的に所有することが大規模生産としての協業を規定するのだから、協業をその基礎として形成される資本の生産様式には資本主義的な生産関係が内包されていることになる。マルクスは、「剰余価値の第二の形態つまり相対的剰余価値としての形態においては、資本に立脚する生産様式の産業的でかつ独特の歴史的な性格が直接に現われる」(Grundrisse, S. 640) というが、生産様式が独自の歴史的な性格をもつ根拠は、それが資本家のもとでの社会的な生産条件の集積という資本主義的な生産関係のもつ追加的な一面に規定される点にある。そもそも、「資本にもとづく (gegründet) 生産様式」(Ibid., S. 174, S. 487, S. 592, MEGA, II / 3 · 6, S. 2268) とか「資本に立脚する (beruhend) 生産様式」(Grundrisse, S. 592) とかいうように、生産様式が資本にもとづくという規定そのものが生産様式には特定の生産関係が内在するという事実を含んでいる。なぜなら、「一定の社会的生産関係である資本」(『直接的生産過程の諸結果』, 463 [原] ページ, 圏点-マルクス) というとおり、資本とは、物ではなく、特定の生産関係だからである。「資本が生産様式そのものを変化せしめる」(MEGA, II / 3 · 1, S. 265) あるいは「資本は生産様式を変革する」(『直接的生産過程の諸結果』, 494 [原] ページ, MEGA, II / 3 · 6, S. 2160) というのは、大規模生産が資本家のもとでの社会的な生産条件の集積という資本主義的な生産関係の追加的な一面に裏づけをもつからである。同じことだが、「新しい生産様式つまり資本主義的な生産がなしとげる生産様式における革命」(Ibid., S. 2014) とは、厳密に言えば、敵対的な生産関係のもつ追加的な一面に対応する。また、マル

クスのつぎの叙述は、資本家のもとでの社会的な生産条件の集積が資本主義に独特な生産様式を創造するという説明を裏づける点で注目に値する。「生産者からの生産条件の疎外（Entfremdung）には、生産様式そのもの（die Produktionsweise selbst）の現実の変革が対応している。個々別々な労働者たちが大きな作業場に集められて、分業化され互いに補足し合う活動をする。道具は機械になる。」（*Kapital*, III, S. 610）生産様式が独自の歴史性をもつのは、資本主義の基礎上で敵対的な生産関係に規定され、生産手段が剰余労働を吸収する主体に転化して逆に労働者を客体として使うという独自の社会的規定性—「生産諸手段の社会的規定性」（*MEGA*, II / 3・6, S. 2180, 圈点—マルクス）—をうけとるのと同じである。最後に、マルクスは、1875年に執筆したいわゆる『ゴータ綱領批判』のなかで「生産諸条件の分配は生産様式そのもの（die Produktionsweise selbst）のひとつの特徴である」（*Kritik des Gothaer Programms, Werke*, Bd. 19, S. 22）という生産様式にかんする根本命題を与えているが、これは無限定の生産様式範疇が生産関係を内包するという事実の決定的な典拠の一つである<sup>9)</sup>。さらにいえば、特定時代の所有の定義はその社会関係の説明に帰着するとマルクスはいう。「それぞれの歴史的時代に、所有は、さまざまに、そして全然異なる一連の社会的諸関係のなかで、発展した。だからブルジョアの所有を定義することは、ブルジョア的生産の社会的諸関係のすべてを説明することにほかならない。」（『哲学の貧困』国民文庫、高木佑一郎訳、207ページ）その社会的基礎に敵対的な生産関係を見だし、大規模作業場をもって資本主義の独特な創造物とする説明そのものが、マルクスにとって資本主義的所有の内容を構成する。その意味では、生産様式による生産関係の包蔵という論点は、すぐれて所有論そのものに帰属する問題でもあることが銘記されるべきである。

それゆえ、『資本論』には、「資本主義的生産様式」（*Kapital*, I, S. 49）と限定のない「生産様式」（*Ibid.*, S. 199）というように、生産関係の内包いかんによって二つの相異なる生産様式の使用法があるというのは、後世の虚構にすぎない。生産様式というかぎり、それは、資本主義的という限定のいかんによらず、生産条件の所有と不可分な関係にたち、『資本論』でのその使用法は

本質的にただ一つしかない。

ひるがえっていえば、マルクスは、「相対的剰余価値の生産は、一つの独自の資本主義的生産様式 (eine spezifisch kapitalistische Produktionsweise) を前提する (unterstellen)<sup>7)</sup>」(*Kapital*, I, S. 533) として、相対的剰余価値をもたらす生産力の三つの契機<sup>8)</sup>を独自に資本主義的な生産様式と規定しているが、協業や分業などの生産様式が独自に資本主義的な生産様式である所以は、それが資本家のもとへの社会的な生産条件の集積という敵対的な生産関係のもつ追加的な一面に立脚する点にある。資本家のもとへの社会的な生産条件の集積という資本主義的生産関係のもつ追加的な一面が大規模な社会的労働の形態を規定するがゆえに、その労働の社会的結合は独自に資本主義的な生産様式を形成する<sup>9)</sup>。そもそも、相対的剰余価値生産が独自に資本主義的な生産様式を前提するとは、剰余価値が資本を前提する関係から推論して、剰余価値を生む資本そのものがその独自の生産様式の母胎である因果をさししめすものにほかならない(資本→独自に資本主義的な生産様式→相対的剰余価値生産)。まさに、資本がその特有な創造物たる独自に資本主義的な生産様式を媒体にして相対的剰余価値生産をもたらすしくみの洞察にこそ、古典派をこえる『資本論』第I巻第4篇の胸のすくような独創性がある。その意味では、「相対的剰余価値の生産は、一つの独自の資本主義的生産様式を前提する」という文言は、第4篇を第3篇との関連で理解するさいの決定的な規定である。ここには、古典派を超克したマルクスの創見が凝縮されている。マルクスは、近代工場を資本にとって「自己に特有な生産様式」(*MEGA*, II / 3 · 1, S. 83) というが、資本にとって近代工場のもつ特有性とは、そこに資本主義的生産関係の追加的な一面の裏づけがある事実による。無限定の生産様式を一方で生産関係と無縁と主張しつつ他方で独自に資本主義的な生産様式というのは、絵にかいたような前後撞着である。

以上、本節で、機械制大工業を完成形態とする生産様式には生産関係が内蔵されている事実を主張した。従来議論では、機械制大工業が理論上協業を基底とした三層構成によって成り立つとする理解までは正しい。しかし、それは問題の前半部分にすぎない。詰めるべき問題の後半部分は、協業を基底にもつ

近代工場がもつづく社会関係いかにある。先行研究にあつては、近代工場の内部編成にのみ目がはりつき、その工場の歴史的な成立根拠いかにあるという特異な社会関係の隠された論点は不問にふされる陥穽がある。機械制工場の特異な成立根拠の看過は、その特殊歴史性の無視と同じである。

- 1) 概念上、「マニファクチュアすなわち分業を特徴とする工業生産様式」(MEGA, II/3・4, S. 1403)とか「分業にもとづく生産様式」(MEGA, II/3・6, S. 2016, 圏点—マルクス)あるいは「機械に対応する(entsprechend)生産様式」(Ibid., S. 2015)・「機械にもとづく(beruhend)生産様式」(Ibid., S. 2055)という表現がしめすのと同じように、協業も、それ自体一つの生産様式である。ただし、それは、多数の労働力が完成生産物のために一つに結びあわせられ個々別々に独立しては支出されない労働過程の仕方様式の変化をもたらすからである。「協業は、資本のもとへの労働の包摂がもはや単なる形態的包摂として現われるのではなく、それが生産様式そのものを変化させることによって資本主義的生産様式が独自の生産様式となっている第一の段階である。」(Ibid., II/3・1, S. 235, 圏点—マルクス)
- 2) 法隆寺の修理に代々携わり薬師寺の再建にかかわった宮大工の家系の棟梁は、つぎのように体験的にかたっている。職人にとって「道具は肉体の一部」(西岡常一『木に学ぶ』小学館, 1988年, 35ページ)・「道具は自分の肉体の先端」(33ページ)であり、「頭で思ったことが手に伝わって道具が肉体の一部ようになる」(同ページ), と。
- 3) 「その単純な形態における協業は、依然として、そのより高度に発展したすべての形態の、基礎および前提であり続ける。」(MEGA, II/3・1, S. 229)
- 4) 以下の引用文は、すべて資本主義的生産が本質的に大規模生産である事実のマルクスによる強調である。「近代工業は、家父長制的な親方の小さな仕事部屋(die kleine Werkstube)を工業資本家の大工場(die große Fabrik)に変えた。」(Manifest, Werke, Bd. 4, S. 469)「協業や分業や機械などの充用、要するに大規模生産、したがって大量生産」(Mehrwert, MEGA, II/3・3, S. 1143)。「商品生産という地盤は、大規模な生産を、ただ資本主義的形態においてのみになうことができる。したがって、個々の商品生産者の手のなかでのある程度の資本の蓄積が、独自の資本主義的生産様式的前提になるのである。」(Kapital, I, S. 652)「資本主義的生産様式は生産の大規模を前提するので、また必然的に販売の大規模をも前提する。」(Ibid., II, S. 114)「資本主義的生産ははじめから大量生産である。」(Ibid., III, S. 191)「資本主義的生産様式つまり大規模生産」(『資本の流通過程』大月書店, 中峯・大谷他訳, 93ページ)。
- 5) 「分業によって特徴づけられるような協業は、労働者の集合を前提し、したがっ



- てまた…大規模生産の客体的諸条件を前提する。」(Mehrwert, MEGA, II / 3 · 4, S. 1402 f., 圏点—マルクス)
- 6) 『資本論』第Ⅱ巻には「生産様式が資本主義的であろうと非資本主義的であろうと…」(Kapital, II, S. 198)という文言があるが、これも無限定の生産様式が生産関係を包含する典拠の一つである。
- 7) したがって、資本による労働の実質的包摂は独自に資本主義的な生産様式のなかで成り立つ。「資本のもとへの労働の実質的包摂または独自に資本主義的な生産様式」(『直接的生産過程の諸結果』, 481 [原] ページ, 圏点—マルクス)。
- 8) 「協業, マニユファクチュアの分業, 機械など, 一言にして言えば, 集団労働の諸能力を飛躍的に増大させるのに適切な方法」(『フランス語版資本論』下巻, 江夏・上杉共訳, 法大出版局, 274 [原] ページ)。
- 9) マルクスにとって機械制大工業という姿の工場制度は, 要するに社会的に結合された労働の形態にはかならない。「多数の労働者が同じ商品の生産において一緒に労働する独自の資本主義的生産様式」(MEGA, II / 3 · 6, S. 2183)・「社会的に発展した労働の諸形態, 協業, マニユファクチュア (分業の形態としての), 工場 (物質的基礎としての機械装置にもとづいて組織された社会的労働の形態としての)」(Mehrwert, MEGA, II / 3 · 6, S. 2161)。

### 3 労働過程の一般的性格と歴史的規定性

前節で, マルクスが無限定で使う生産様式には生産条件の所有が内蔵されているという命題を定立した。マルクスが使う無限定の生産様式は労働過程にかかわる範疇だから, 人は, ともすればそれが生産条件の所有を含有しない範疇だという先入観をいだきがちになる。しかし, その既成観念は, 『資本論』第Ⅰ巻第3篇第5章第1節で問題対象としての労働過程にマルクスが与えた限定条件をなおざりにすることから生まれる。そこで, 本節では, 第5章第1節は, 機械制大工業を頂点とする資本主義的生産の基礎上的労働過程をもって人間と自然とのあいだの一過程という基底的な一面からみたものにすぎず, 労働過程は, 特定の生産形態にあつては, 人間と自然との物質代謝の一過程という一般的性格と同時に, 生産条件の所有に規定され協業や分業などに表現される歴史的規定性をあわせもつ事実を究明する。

通常, 労働過程といえは一面的に人間と自然とのあいだの超歴史的な過程と

みなされるその直線的な帰結として、生産方法と同義語の生産様式は生産関係とは無縁だという固定観念が生じる。しかし、それは、マルクスが第5章第1節で問題対象の労働過程にくわえた留保文言の閉却に起因する。マルクスは、最初のパラグラフで問題対象としての労働過程をつぎのように限定する。「使用価値または財貨の生産は、それが資本家のために資本家の監督のもとで行なわれることによって、その一般的な性質を変えるものではない。それゆえ、労働過程はまず第一にどんな特定の社会的形態にもかわりなく考察されなければならないのである。」(*Kapital*, I, S. 192, 圏点一頭川) また、第5篇第14章「絶対的および相対的剰余価値」の冒頭でつぎのように回顧される。「労働過程は、まず第一に、その歴史的諸形態にかわりなく、人間と自然とのあいだの過程として、抽象的に考察された(第5章を見よ)。」(*Ibid.*, S. 531, 圏点一頭川) ここで、マルクスは、労働過程をその特定の社会的形態から抽象して分析対象に設定すると明言しているが、労働過程が特定の社会的形態をもつという場合、そこに二つの含意がある。第一は、資本の生産過程のように、労働過程は、それが同時に価値増殖過程をなす点で人間と自然とのあいだの超歴史的な一過程とは別個の歴史的な規定性をもつ。「労働過程の第二の期間すなわち労働者が必要労働の限界をこえて労苦する期間」(*Ibid.*, S. 231) というように、価値増殖過程は労働過程そのもののもつ特定の社会的な一面である。第二に、「労働過程そのものの協業的性格」(*Ibid.*, S. 531) とか「ますます大きくなる規模での労働過程の協業的形態<sup>2)</sup>」(*Ibid.*, S. 790) とかいうように、労働過程は、協業や分業などに表現される労働の社会的結合つまり社会的な労働過程を包含する点で特定の社会的規定性をもつ。だから、特定の社会的形態とは関係のない第5章での労働過程の抽象性とは、価値増殖過程と労働の社会的形態との二つの歴史的な規定性の捨象を意味する。ここでの問題関心からいえば、第5章では資本主義的な労働過程から協業や分業などに表現される社会的な労働過程という特殊な歴史的規定性が問題の射程外におかれる手続きに最大限注意を喚起する必要がある。そうすれば、第5章で、労働過程は、協業や分業などに表現される社会的な労働過程という特殊な歴史的規定性が度外視され、どの生産形態にも共通する人間と自然とのあいだの一過程に還元されてい

ることになる。「労働過程の、ここで考察された形態は、すべての規定された歴史的な諸特徴を剥ぎとられた、そしてあらゆる種類の労働過程に適合する、その抽象的な形態にすぎない。」(MEGA, II / 3 · 1, S. 56)「労働過程の抽象的な形態は、むしろどの生産様式にも、その社会的な姿態や歴史的な規定を問わず、共通である。」(Mehrwert, MEGA, II / 3 · 4, S. 1491)「労働過程の一般的な諸契機、つまり、たとえば労働者自身の生きている活動にたいしての对象的な労働条件の材料と手段とへの分離などは、生産過程のどの歴史的な独自に社会的な性格にもかかわりのない、そして生産過程のすべての可能な発展形態に等しくあてはまる規定であって、事実上人間労働の不変な自然条件なのである。」(『直接的生産過程の諸結果』, 471 [原] ページ)「資本主義的労働過程 (der kapitalistische Arbeitsproceß) は労働過程の一般的な諸規定を廃棄しはしない。」(同上, 480 [原] ページ)「資本から分離されれば、生産過程は労働過程一般である。」(Kapital, III, S. 395)「労働過程がただ人間と自然とのあいだの単なる過程でしかないかぎりでは、労働過程の単純な諸要素は、労働過程のすべての社会的発展形態につねに共通なのである。」(Ibid., S. 891, 圏点-頭川)だから、第5章での分析対象の労働過程が特定の生産形態に関係のない人間と自然とのあいだの超歴史的な一過程だといっても、それは敵対的生産関係のもとで労働過程が協業や分業などに表現される独自に社会的な労働の形態をとる特殊な歴史性を少しも排除しない。むしろ、第5章での問題対象の限定性は、生産関係のいかんに対応して、労働過程が労働の独自に社会的な形態をとることを含有しているのである。第5章では、「労働過程の一般的形態」(MEGA, II / 3 · 1, S. 57)・「労働過程一般」(Ibid., S. 82, 圏点-マルクス)・「その歴史的な規定性を捨象した労働過程」(Ibid., S. 83)・「単純な労働過程」(Kapital, III, S. 890)が問題対象になる半面、「労働過程の…歴史的に規定された社会的形態」(Ibid., S. 832)は特定の生産関係に対応するため分析の圏外に横たわる。協業や分業などの生産様式が第5章で捨象された労働過程の特定の社会的形態だとすれば<sup>3)</sup>、つぎの段階では、生産条件の所有との隠された関連をもつ協業や分業などの生産様式を問題対象として復元することに分析の焦点がうつることになる<sup>4)</sup>。

以上、本節で、マルクスは、第5章第1節で労働過程を考察するさい、その超歴史的な一面のみを抽出する半面、労働の独自に社会的な形態というその特殊歴史的な一面を問題の領域外へ捨象している事実を主張した。

- 1) 「労働過程そのものは、その一般的な形態から見るときには、まだどんな特殊な経済的規定性においても現われない。」(MEGA, II/3・1, S. 56, 圏点—マルクス)「労働過程一般ないし生産過程一般それ自体—どんな一定の社会的形態をも度外視した—」(Ibid., S. 129)。
- 2) 以下の表現も、協業や分業がそれ自体としては労働過程に属する範疇であることをしめす。「協業的労働過程」(Kapital, I, S. 353)・「労働過程での協業」(Ibid.)。「単純協業は、その発展した諸形態と同様に、労働過程に属する。」(MEGA, II/3・1, S. 233)
- 3) 歴史上、協業や分業がいわばいつの時代にも部分的に散在した事実(Grundrisse, S. 38, MEGA, II/3・1, S. 229—31, Kapital, I, S. 377f.)から、その二つが必然的に生産活動の基本形態として営まれる資本主義での両者のもつ独自の歴史的 성격が看過されがちである。しかし、同じ協業や分業といっても、資本主義のように生産活動の基本形態になる場合と資本主義以前のそうでない場合とでは本質的な相違がある。同一性格の問題は商品の場合にもあてはまる。商品の歴史は共同体の発生とともに古いが、生産物が部分的に商品になると資本主義のように商品が生産物の一般的な形態である場合とでは、商品の社会的な性格は決定的に相異なる。前者では、生産者が相互に私的所有者として相対する関係が生産物の商品への転化を規定するのに反して、後者では、生産条件の労働者からの分離が商品形態の一般化をもたらすから、同じ商品といっても両者の歴史的 성격は相異なる。これと同じように、協業や分業も、生産活動の基本形態になる場合には独自に違う歴史的な性格をもつ。「以前の諸生産時代に属する経済的範疇でさえも、資本主義的生産様式の基礎の上では、独自に違う歴史的な性格 (ein spezifisch verschiedner, historischer Charakter) を受け取るのである。」(『直接的生産過程の諸結果』, 442 [原] ページ, 同じ趣旨の一文は, MEGA, II/3・1, S. 286 f.にもある) 同じ範疇でも生産形態が異なれば独自の歴史性を受けるというマルクスの指摘には、砂漠に埋もれた一粒の砂金のようなかがやきがある。
- ④ マルクスの完全校閲になるフランス語版『資本論』には、生産様式=「技術的生産様式 (le mode de production technique)」(『フランス語版資本論』下巻, 327 [原] ページ) という言い換えがある。しかし、生産様式=「技術的生産様式」という等置は生産様式が生産関係を含まない事実を裏づけない。けだし、「資本のもとへの労働の実質的包摂のもとで、…技術的な過程である労働過程における変化のすべてが始まる。」(MEGA, II/3・6, S. 2142, 圏点—頭川) というよう

に、生産様式は、第3篇から第4篇にかけて、生産関係のもつ追加的な一面に規定され独自に社会的な労働の形態に編成替えされても、それ自体労働過程そのものの仕方様式である事実が変わりがないからである。生産様式＝「技術的・生産様式」という等置は、独自に資本主義的な生産様式をもってその超歴史的な契機としての労働過程に還元した規定にほかならない。

#### 4 資本主義と高度な生産力

前節までの行論で、労働過程の範疇に属する生産様式には生産条件の所有が前提されている事実を解析した。ところが、資本の存在形態こそ近代工場をなし、その工場は高度な生産力を生み出す労働の独自の社会的形態をとって存在するのだから、資本の存在は高度な生産力として発現することになる。つまり、概念上、資本の形成は高度な生産力の形成と同じである。資本家のもとの社会的な生産条件の集積という資本主義的・生産関係のもつ追加的な一面は、協業を基礎とする大規模な生産様式を規定することによって、高度な生産力を内在的に形成する。そこで、本節では、資本の概念そのもののなかに高度な生産力形成が内含されている両者の因果関係をときあかす。

資本主義的・生産の最大の特徴の一つは、以前のどの生産形態にもない高水準の生産力形成にある。「資本主義的・生産様式—それは以前のどの生産様式にもまして労働の社会的生産力を発展させる—」(*Kapital*, II, S. 143)。「資本主義的・生産様式は最も生産的な生産様式である(従来の諸形態に比べて無条件的にそうだ)。」(*Mehrwert*, *MEGA*, II/3・2, S. 519)「社会的労働の生産力が最も強力に発展させられる形態は、資本の形態である。」(*Ibid.*, *MEGA*, II/3・5, S. 1855)「資本主義的・生産はこれまでのいっさいの生産様式のなかで最も生産的なものである。」(*MEGA*, II/3・6, S. 2145)「社会的労働の生産力は、歴史的には独自に資本主義的・生産様式とともに始めて発展(する)。」(『直接的生産過程の諸結果』, 489 [原] ページ, 圏点—マルクス) マルクスが資本主義での「生産力の物質的発展」(*Kapital*, III, S. 457)をもって「より高度な生産形態の物質的諸条件」(*Ibid.*, S. 269)・「新たな生産形態の物

質的基礎」(Ibid., S. 457)と位置づけ「資本主義的生産様式の歴史的任務」(Ibid.)・「資本主義的生産の歴史的意義」(『直接的生産過程の諸結果』, 472 [原] ページ)と規定した基本命題はあまりにも有名である。「社会的労働の生産力の発展は、資本の歴史的な任務 (die historische Aufgabe) であり、弁明理由である。」(Kapital, III, S. 269, MEGA, II / 3 · 5, S. 1641)「自由な人間社会の物質的基礎を形成しうる社会的労働の無容赦な生産力の創造」(『直接的生産過程の諸結果』, 466 [原] ページ)。それでは、資本主義ではなぜ以前の社会に比較して格段に高い生産力が獲得されるのであろうか。その根本的な理由は、資本家のもとでの社会的な生産条件の集積に規定されて多数労働者が同一空間で作業する労働の独自の社会的形態が成り立つ点にある。労働力の生産的発揮が社会的な労働過程<sup>1)</sup>のなかで実現されれば、共同労働は、個々の労働が孤立的に支出される場合にはもちえない生産性を獲得する。「資本が相対的剰余価値を創造するための、生産諸力を高め生産物量を増加させるための手段は、すべて労働の社会的形態である。<sup>2)</sup>」(MEGA, II / 3 · 1, S. 285)「資本主義的生産の利点すなわち労働の社会的諸形態とそこから生ずる労働の生産力との発展」(Ibid., II / 3 · 4, S. 1488)。同一空間のもとでの多数労働者による大規模な労働は、孤立的な労働の成果の算術的な総計をうわまわる生産性—synergy effect—を達成する。たとえば、協業にかんして、マルクスはその生産力増進効果を労働の社会的な形態によって説明している。「一個人では100日かかってもできないこと、またしばしば、ばらばらの100人では100日かかってもできないことを、協業による100人は1日でやってのける。つまりこの場合には、個々人の生産力が、労働の社会的形態 (die gesellschaftliche Form der Arbeit) によって増大するのである。」(MEGA, II / 3 · 1, S. 232)労働生産性は社会的に結合された労働の形態によって増大する反面、その大規模な結合労働の社会的な基礎は資本家による生産条件の排他的所有にある<sup>3)</sup>から、結局、近代工場という資本の存在形態そのもの—「資本の定在形態である作業場」(MEGA, II / 3 · 1, S. 265)—が高度な生産力の物質的な形態だということになる。だから、生産条件の集積にもとづく労働の独自に社会的な形態こそ、資本主義特有の生産力を創出する高性能のエンジンをなし、生産力増進を強制

する資本の致富衝動は、そのエンジンに指令をあたえるアクセルにすぎない<sup>4)</sup>。資本主義の高度な生産力は、あたかも細胞のなかのDNAのように生来その生産関係のなかに埋めこまれているのである。一部の人々による生産条件の排他的所有は、一方で生産条件の労働者からの分離というその基底的な一面によって剰余価値を形成する半面、他方では少数の資本家のもとへの社会的生産条件の集積というその追加的な一面によって高度な生産力の物質的な基礎を創造する。排他的に所有された生産条件は資本を形成するから、資本の生成はそれ自体ハイレベルの生産力形成をあらわす<sup>5)</sup>。資本そのものが高度な生産力の表現だから、剰余価値の資本への再転化たる資本蓄積の過程では、資本規模の拡大に照応して生産力は高度な発展をとげることになる。だから、富の蓄積の特殊歴史的な表現である資本蓄積の過程は、同時に生産力の顕著な増大の過程でもある。貧困の蓄積に対応する富の蓄積は、生産力の特異な増進と同じである。

ふりかえっていえば、社会的労働の生産力は、本来個々の労働力の集合的な効果を根拠にして生まれるのに反して、資本そのものの内在的な生産力として現われる<sup>6)</sup>。そこで、なぜ社会的労働の生産力から資本のそれへの転換が生じるかといえ、その理由は、排他的に所有された生産条件こそ労働者が共同労働するための物質的条件をなし、集団的に結合された多数の労働力は、排他的に所有された生産条件つまり資本の単なる存在形態にすぎないからである。

以上、本節で、労働の独自に社会的な形態を具現する近代工場はそれ自体資本の特有な存在形態をなすがゆえに、資本の生成は即高度な生産力の形成であることを論じた。

- 1) 小規模で分散的な労働過程が「個別的労働過程」(*Kapital*, I, S. 350)であるのに対して、大規模な共同労働の成り立つそれが「社会的労働過程」(*Ibid.*)・「共同的な労働過程」(*Ibid.*, S. 352)・「大きな社会的規模の結合された労働過程」(*Ibid.*, S. 525f.)・「労働の社会的結合」(*Ibid.*, III, S. 89)ともよばれる。
- 2) 労働の社会的な形態は、労働生産性増進をもたらす半面で生産手段充用の節約を生みだし、商品価値の低廉化に貢献する。「不変資本の節約—資本主義的生産様式のなかで労働が受け取るその社会的形態によってはじめて可能になる。」(*MEGA*, II / 3・6, S. 2015, 圏点—マルクス) 共同的な生産手段充用の節約効

果は、「労働そのものの生産性の上昇とは直接には別のもの」(Ibid., S. 2144)である。

- 3) 「結合された労働の社会的形態は、労働者に対立する資本の定在なのである。」(MEGA, II / 3 · 1, S. 254, 圈点-マルクス)
- 4) 「資本は、果てしない致富衝動にかりたてられて生産諸力の果てしない増大を追求する。」(MEGA, II / 3 · 6, S. 2039)
- 5) 無限定の生産様式を生産関係と無縁とみなす立論は、史的唯物論の一般的定式をしめす『経済学批判』の「序言」(Kritik, Werke, Bd. 13, S. 8f.)で、生産力が生産関係を一方的に規定するという考え方をマルクスがとったという理解に主要な根拠の一つをもつと推論される。しかし、マルクスは、『経済学批判』の「序言」で、たとえば資本主義的な生産関係が本源的には封建制で到達した生産力に対応して成立する旨をのべたにすぎない。つまり、『経済学批判』の「序言」での生産力による生産関係の規定は、特定の生産関係が最初に成り立つさいの両者の関係である。一旦、資本主義的な生産関係ができれば、その一面に規定された労働の社会的形態の創造による高度な生産力は逆に生産関係と矛盾をきたし、その生産力に対応して新しい生産関係が形成されることになる。これが、『経済学批判』の「序言」での両者の基本的な関係である。ちなみに、資本主義的な生産関係のもつ一面が高度な生産力を生み出すという『資本論』と同じ因果関係は、『経済学批判』(1859年発刊)以前の1857-58年の執筆になる『経済学批判要綱』ですでに確立済みである。というのも、そこで、マルクスは、「マニユファクチュアの発生」(Grundrisse, S. 479)を「資本の生産様式の発生」(Ibid.)と想定すれば、マニユファクチュア発生以前には「資本そのものによってはじめて呼び起こされることができる労働の生産力はまだ存在していない」(Ibid.)と明言しているからである。『経済学批判要綱』には、資本主義的な生産関係と生産力の関係についての『資本論』と本質的に同一の規定がすでにあるとすれば、その直後の発表になる『経済学批判』で生産力による生産関係の規定だけが定式化されるということは天地がまっぶたつに裂けてもありえない。生産力が生産関係を規定する一方的関係がマルクスの考え方だったという『経済学批判』の「序言」の一部理解は根本的検討を要する。
- 6) 「資本はすでに非常に神秘的なものになる。というのは、労働のすべての社会的生産力が、労働そのものではなく資本に属する力として、資本自身の胎内から生まれてくる力として、現われるからである。」(Kapital, III, S. 835)



## む す び

本稿で、工場制度の社会的基礎には生産条件の排他的所有があるという事実から、協業や分業などに表現される生産様式には敵対的な生産関係が包含されているという一命題を提唱した。一般に、生産活動は生産条件の所有の前提上に成り立つ。生産条件をだれが所有しているかをぬきにして、生産活動は成立しない<sup>1)</sup>。だから、生産様式が生産関係を含有するという命題は、生産活動が生産条件の所有の前提上に成り立つというごく簡単な命題に還元される。生産様式が生産関係を含まないという議論は、生産活動が生産条件の所有ぬきに成り立つという主張に帰着する点で初歩的な原理を等閑にふす背理に等しい。生産様式が生産関係を含まないという主張に固執すれば、『資本論』は鉄の胴体にたいして粘土の足でたつ事態におちいる。『資本論』の先行研究を吟味するさいには、はだかの王さまをみた純朴な子供の目の必要性が痛感される。

- 1) 「およそ生の生産なるものはただちに或る二重の関係として――一面では自然的関係として、他面では社会的関係として――現われる。」(『ドイツ・イデオロギー』国民文庫、真下信一訳、57ページ)「経済学者たるブルードン君は、人間が一定の生産諸関係においてラシヤ、麻布、絹布を製造するものであることを非常によく理解した。」(『哲学の貧困』、151ページ)「生産とはすべて、ある一つの規定された社会形態のなかでの、またそれを媒介としての、個人の側からする自然の領有である。」(Ibid., S.25, 圏点-頭川)「生産は生産諸用具の特定の分配から出発しなければならない。」(Ibid., S. 33)